



## 年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

イエス・キリストというピースを埋めて人の一生は完成する

今週の福音朗読のまとめとして、「イエス・キリストというピースを埋めて人の一生は完成する」としたいと思います。(わたしたちの人生に起きるさまざまな場面はどこかできちんと繋がっているのですが、人生をパズルにたとえるなら「イエス・キリスト」というピースがあって初めてすべに説明がつき、すべてが意味あるものになるということです。)

いよいよ、およそ 100 キロの徒歩巡礼が明日から始まります。このあと鯛ノ浦 11 時発の船で長崎に移動し、明日の朝、国宝大浦天主堂で巡礼に参加する神父さま 6 人でミサをして、朝 8 時に大浦を出発します。予定では 3 日かけて福岡県三井郡大刀洗町にある今村教会に到着となっています。無事に帰ることができるように、お祈りください。

教会入り口に貼り付けた巡礼コース表は御覧になったでしょうか。浦上のキリシタンが自分たちの信仰をプチジャン神父に「ワレラノムネ、アナタノムネトオナジ」と表明した 2 年後の 1867 年に、浦上キリシタンたちは今村のキリシタンを確かめに行きました。彼らは「長崎ではフランス人宣教師が入っている。宣教師の居留地内には教会も建てられている。宣教師から教えを受けることもできるし秘跡を授けてもらうこともできる」と伝えに行っただけでした。

今村のキリシタンにも、長崎のキリシタン同様正統信仰が誤りなく保たれていたのですが、外国に港を開いた長崎は外国人居留地に宣教師がやってきて、正統信仰を確認してもらうことができたのに対し、その他の地域では宣教師は移動が制限され、入ることは叶いませんでした。

もし勇気あるキリシタンが長崎の状況を伝えに行ってくれなかったら、外国人居留地から遠く離れた人々はカトリック教会に復帰できなかったかも知れません。命がけで守り抜いてきた人々の信仰を宣教師が正しいものと確認する。この 1 つの作業、1 つの部品が欠けるだけで、260 年もの間奇跡的に守り抜いてきた信仰がバラバラになってしまう危険もあったのです。

今週選ばれた朗読箇所ではイエスは律法について次のように仰いました。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っただけではない。廃止するためではなく、完成するためである。」(5・17)

イエスが律法を完成させるとはどういうことでしょうか。わたしは、イエスが律法と預言の書すべてをつなぎ止める鍵を持っておいでになった、というふうに考えてみました。

つなぐものがなければバラバラになる。材料をつなぐのにどうしても必要なものがあるように、イエスは律法と預言書がバラバラにならないようにつなぎ止めるのに必要な鍵として、おいでになったのです。

イエスが宣教活動をしていた当時、律法はバラバラになりかけていました。それぞれの掟が、どのように結びついて、全体として人を神へ

と向かわせるものなのか、あるべき姿を失っていました。そのことを見事に表しているのが律法学者の次の質問です。

「そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。『先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。』」（マタイ 22・35-36）どれが第一となって、律法がしっかり組み合わされてわたしたちを活かす掟となっているのか、彼らは見失っていたのです。

今日の福音朗読の中にも律法がバラバラになっているさまがあちこち見られます。「殺してはならない」という掟は理解していても、それが「兄弟に腹を立てる」「ばかと言う」「愚か者と言う」それらと実は繋がっていることは理解していなかったのです。それに似たことが今週の朗読にいくつも紹介されています。

これに対し、イエスははっきりと、ご自分が律法と預言書の要の石、すべてを一つにつなぎ合わせる鍵であることをお示しになりました。しかも、とてもわかりやすい言葉でお示しになりました。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」「隣人を自分のように愛しなさい。」（同 22・37,39）イエスが、律法のすべてをつなぐ鍵となってくださり、律法は完成されました。

もっと言えば、イエスはすべてのものを一つにつなぎ合わせ、完成する鍵です。わたしたちの人生の一つ一つの出来事を意味あるものにつなぎ合わせてくれるもの、それは運命とか偶然とかではなくて、イエス・キリストなのです。都合の良い出来事には自分なりの意味を見つけるかも知れませんが、説明のつかないこと、ほかの人には降りかかっていない災難など、すべてを意味のあるものにしてくれるのは人間の力では到底不可能です。イエスはそれらをすべてにつなぎ合わせ、わたしの人生の中で意味のあるものにしてくださいます。

わたしは明日から、徒歩巡礼の旅に出ます。260年の迫害に耐えて信仰を密かに守り、子孫に伝えた苦労は、どんな言葉でも説明し尽くすことはできないと思います。ですが、「司祭が今わたしたちに与えられた。イエスはわたしたちの苦しみを忘れてはおられなかった」この体験は、浦上キリシタンの苦しみ、涙をつなぎ合わせ、意味のあるものにしてくれたのではないのでしょうか。そのことをだれよりもよく分かっていた浦上のキリシタンは、熱意に駆られて今村に飛んでいったのだと思います。100キロ近く歩いて、わたしも「苦労をすべて意味のあるものにつなぎ合わせるのはイエス・キリストしかいない」ということを学んで帰ってきたいと思います。

皆さんお一人お一人の人生も、何かでつなぎ合わされて一つにまとまるのだと思います。あなたの人生の喜びや悲しみをつなぎ合わせるものは何でしょうか。お金や出世やそのほかの優越感でしょうか。それらはいつかわたしにとって意味のないものになるのではないのでしょうか。イエス・キリストこそ、わたしの人生を完成させるかけがえのない要石であることを確認しましょう。そして「完成させるためにやってきたイエス」を、人々に告げ知らせる勇気を、このミサの中で願いましょう。